

02 地域が育てる・地域が取り戻す

—地域・企業・学校・家庭の4者— (中学校特別支援学級)

「ぶれジョブ」の運営は、同じ生活圏域に住む障害のある生徒とその家庭・地域に住むジョブサポーター（体験に付き添う地域の人）・地域の企業・学校の4者で組織した仲間の集う任意団体によって行われている。毎週1時間、放課後か土・日曜日に地域の企業で職場体験をする課外活動を年間通して行う。6ヶ月経過後に次の職場の体験に移る。そして、月1回の地域の定例会に参加して仲間と活動を共有することを大切にしている。

小学校5年時から高校3年生までの8年間をかけて地域で活動を続け（幼児期早期から保護者・本人は定例会に参加し地域に出る）、地域で決まったルーチンを繰り返すことが勤労観・仕事観を育てることになる。この活動全体を「ぶれジョブ」と呼ぶ。

【新しい試み】：生徒の生活圏域で取り組む。非専門家のかかわり。

【特徴】：①時間をかける。環境を育てる。

②本物から学ぶ。現場で学ぶ。

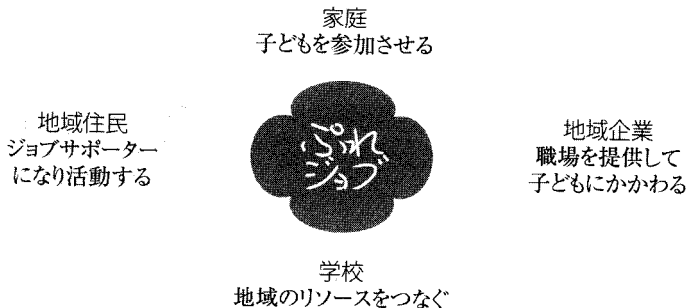
1 インターンシップ（ぶれジョブ）のねらい

- ①障害のある子どもの職場体験を媒介にして、かかわる人たちが地域の中で新しい関係を再構築する。時間と手間をかけて地域住民になるプロセスを大切にしている。五感を使ったコミュニケーションで共有する時間を楽しむ。
- ②学校や企業は、生徒の好み・能力・職場の三領域の重なりを見つけ、それを生かした就労のカスタム化を目指す。
- ③地域住民や地域企業は、直接障害のある生徒と接する経験をすることで既存の価値観や自分の中にある偏見に揺さぶりをかけられる。障害者の中にある自然性に気づき、社会のありようを考える自立した地域市民が育つ。
- ④保護者の障害受容が進み、地域の中で希望を見いだす。ありのままの子どもを一番理解してもらいたいところが住む地域であり、また一番不安に思うところが地域でもある。住んでいる地域に縁者ではない温かな理解者（地域住民・地域企業）がいることに気づき、わが子が地域づくりの大きな役割を果たすことを知ることで保護者自身の自己肯定感が上がり、安心する設定になる。障害のある子どもの二次障害を防ぐことにかかわってくる。

2 インターンシップの計画

(1) 教育全体計画と個別の活動計画

①活動の場をその子どもの暮らす生活圏域に設定する。



②四者が集う定例会（毎月1回）

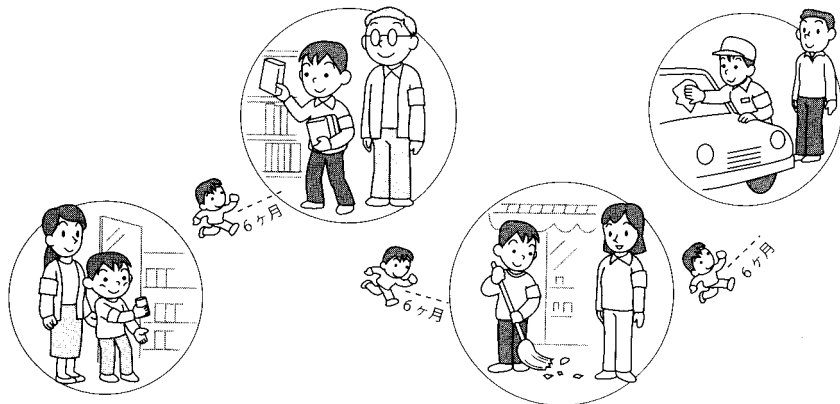
○お茶を飲みながらの情報交換で地域の子どもの成長をみんなで楽しむ。

役割がある活動を重ねることでゆっくり地域住民になっていく。

○会に安心感が出てくると課題の相談場所になり、問題意識も芽生える。地域住民の生涯学習の場になる。

○活動の主体者障害のある子どもは小学校5年生から高校3年生までの限られた8年間である。構成メンバーも入れ替わり留まらない。いつも活動は流れ生きている。

③6ヶ月ごとの体験を8年間積み重ねていく。



(2) 教育課程における位置付け（特別支援学校学習指導要領）

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項（第1章第2節教育課程の編成）

1 (6) 学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、学校相互の連携や交流を図ることに努めること。特に、児童又は生徒の経験を広めて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性をはぐくむために、学校の教育活動全体を通じて、小学校の児童又は中学校の生徒などと交流及び共同学習を計画的、組織的に行うとともに、地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けること。

〔職業・家庭〕（第2章第2節第2款2内容）

- (1) 働くことに関心をもち、作業や実習に参加し、働く喜びを味わう。
- (2) 職業に就くためには、基礎的な知識と技能が必要であることを理解する。
- (3) 道具や機械、材料の扱いなどが分かり、安全や衛生に気を付けながら作業や実習をする。
- (4) 自分の役割を理解し、他の者と協力して作業や実習をする。
- (5) 産業現場等における実習を通して、いろいろな職業や職業生活、進路に関心をもつ。
- (9) 家庭生活における余暇の過ごし方が分かる。

〔自立活動〕（第7章第2内容）3 人間関係の形成 (3) 自己の理解と行動の調整に関すること。

- ①この項目について「(3) 自己の理解と行動の調整に関すること」は、自分の得意なことや不得意なこと、自分の行動の特徴などを理解し、集団の中で状況に応じた行動ができるようになることを意味している。
- ②具体的指導内容例と留意点…また、障害のある幼児児童生徒は、経験が少ないことや課題に取り組んでもできなかった経験などから自己に肯定的な感情をもつことができない状態に陥っている場合がある。その結果、活動が消極的になったり、自暴自棄になったりすることがあるので、早期から成就感を味わうことができるような活動を設定するとともに、自己を肯定的にとらえる感情を高められるような指導内容を検討することが重要である。

本活動は前ページに準じ放課後、土・日曜日に行う「教育課程外での活動」である。課外活動のぶれジョブではあるが、教育課程内の自立の時間と連携させることが可能と考えている。高校生を対象として取り組んだ一例と中学生を対象として中学校通級指導に組み込んだ一例がある。

○Self-determination（「本人」が主要な要因となって、「今ある姿」から「ありたい姿」に近づいていくこと）概念を取り入れた自立活動指導。

プロセス：「ありたい姿」に近づくためのゴールを設定し、ゴール達成の方法を考え実行して評価する。評価の結果からゴールや方法を修正しさらに「ありたい姿」に近づくためのゴールを設定。自己効力感、結果期待感、肯定的な自己理解。具体的には自己統制的学習指導モデル「ゴール設定」「計画立案・実施」「評価・修正」の三段階においてそれぞれ四つの質問に答えていく方法を用いる。

○Customized employment（障害者のスキルやニーズや興味が考慮された雇用であると同時に、その雇用者のニーズも満たす雇用であること）

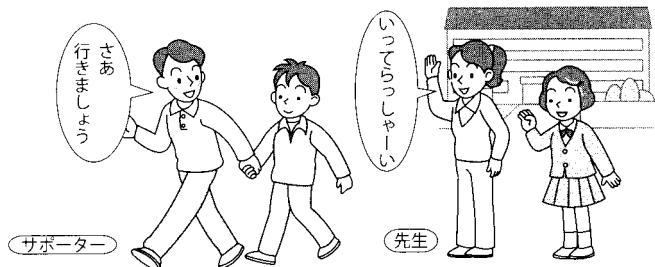
プロセス：〈探索と発見〉本人と長い時間を共にしたり本人に関係のある人々から話を聞いたりすることにより本人のスキルや興味やニーズを明らかにする。〈ポジションの創造〉本人の特性に合う職場を探し、雇用主と仕事内容を設定。

○SEとCEを取り入れた自立指導（例）フェーズ1「ゴール設定」

- 1 「どんな仕事を学びたいですか？」
- 2 「どの仕事がすぐに学べそうですか？どの仕事が難しそうですか？」
- 3 「これらの仕事ができるようになるためには、どのようなサポートが必要ですか？」
- 4 「どうなれば『できるようになった』と言えますか？」…

自立活動の解説書にも「自分の良さに気づくようにしたり、自信が持てるように励ましたりして、活動への意欲を促すように指導することが重要である」が何度も使われている。義務教育の終了する中学校期において、障害による困難さの由来に着目する指導から、むしろ強みをどのように活用し生きる方略を考えるかに着目する指導に視点を変えたICFモデルがこの活動の根拠になる。

3 取り組みの実際

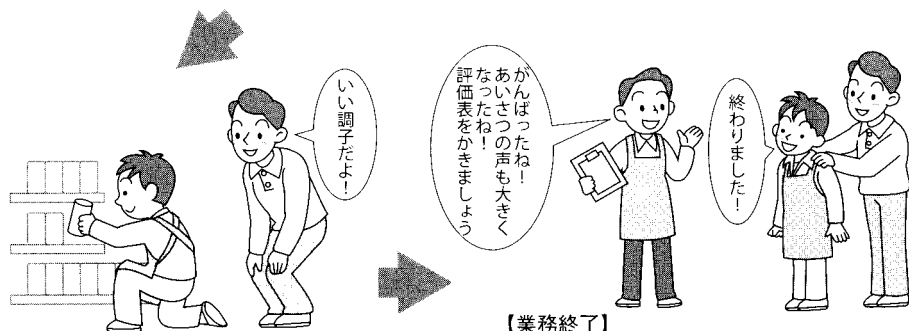


ジョブサポーターが中学校に迎えにきてくれる。そして、一緒に職場に行く。
※状況によっては職場の前で待ち合わせをすることもある。



【職場に到着】

毎週決まった時間に職場に行くと、職場の担当者が迎えにきてくれる。
その後、「今日の仕事」を指示され、作業を行っていく。

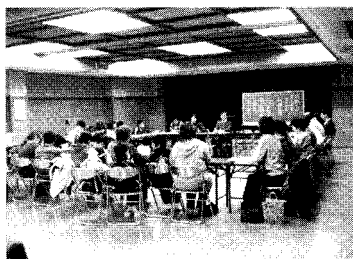


【1時間集中して働く】

困ったときはジョブサポーターが手伝ってくれるので、安心して仕事ができる。

【業務終了】

終わりのあいさつをし、評価表に記入をしてもらい、頑張ったところを褒めてもらう。「もう少し頑張ってください」など、反省点を指摘してもらうこともある。



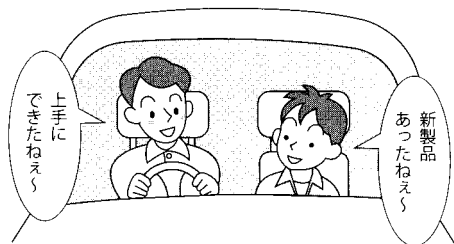
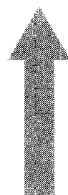
【月に1回の定例会】

1ヶ月に1回職場の人やジョブサポーター、教師と一緒に集まりを開いている。生徒が頑張ったことを報告し合い、次の実習に向けても話し合う。



【翌日の学校】

教師に昨日の仕事を話す。教師が話を聞くことで、次へのモチベーションにもつながっていく。



自宅まで送ってもらう間、生徒の趣味の話などをして、ジョブサポーターと親睦を深める。



【自宅に帰宅する】

ジョブサポーターからは、仕事内容や生徒の態度などの報告がある。

4 インターンシップを振り返って

生徒たちの声

Aさん：はじめはドキドキした。みんなに会える定例会が楽しみ。

Bくん：スーパーも楽しかったけどガソリンスタンドも好きです。次は…。

Cくん：お仕事は楽しいです。

保護者の声

Dさんの声

はじめて体験させた日は私のほうがじっとしていられなくて他のお子さんの体験しているスーパーで買い物をして気を紛らわせました。自信まんまんで帰ってきた子を迎えてほっとすると同時に心配が希望に変わりました。サポーターの方の存在が支えになっています。感謝の気持ちで暮らしています。

教師の声

E先生の声

教室で生徒たちが「ぼくは今日仕事じゃけえ」と自分の仕事を自慢している。人の役に立っているというプライドを感じます。教師が転勤しても地域の人とながっているので体験をつないでいけると思います。

受け入れ先の声

企業Fの実習担当者の声

不器用ではあるけれど能力いっぱい頑張る姿を見るとこちらも刺激を受けます。はじめは少し偏見もありましたが今はそれが恥ずかしいです。ぶれジョブに参加することで私の中にある偏見に気付かされました。

企業Gの実習担当者の声

ぶれジョブを受け入れて5年になります。従業員の間に優しい気持ちが生まれたように思います。ぶれジョブを受け入れる水曜日はお客さんたちもレジ待ちにいらいらしていない様子に驚いています。

ジョブサポーター の声

Gさんの声

退職後の新しい生きがいになりました。地域の子どもを育てるのに役に立てることは本当に楽しいことです。お金に換えることのできない本当の幸せがこんなに近いところにあることに喜びを感じています。

Hさんの声

元気で長生きしてサポーターを続けて就職につながるところまでお手伝いしたいと思っています。

5 今後への展望

「ぶれジョブは懐かしい感じがする」。5年間の活動でよくいわれる言葉だ。ぶれジョブの四葉（地域住民・地域企業・家庭・学校）は昔あった景色の再現である。「地域企業」は、「働く家族の姿自体があちこちの家にあったこと」「学校の行き帰りの道草に職人の仕事を眺めていたこと」「仕事場で落ちていたものを拾ってまねして遊んだこと」「垣根が低いので地域が見渡せ、秘密の会合ができる隙間がどこにあるかわくわくして探したこと」などの置き換えである。「地域住民」は、学校の行き帰りに声掛けしてくれるおばちゃん、いたずらを叱る怖いおじちゃん、不思議な感じのお兄さん、地域に住むちょっと気になる人にちゃんとおせっかいをしてくれる人々であり、『3丁目の夕陽』に出てくる人たちがジョブサポーターである。地域でどんな生きる形をつくるか、やがてどんな仕事をするか遊びながら熟成させる学校の立ち入ることのないキャリア教育の場だった。緩やかではあるが、ある意味責任を伴う厳しいつながりは実は「わずらわしいもの」ではなく、水や空気のように生きるために必要だと気づいている。そして、その思いは私たちの心と住む地域の中に記憶されているので、地域に集う新しいメンバーでいつでも作ることのできる再現可能な活動だ。

学校は四葉の一枚にしかねれない。そして、self-determinationも customized employmentも日本の地域社会でも自然に取り組みれていた時代があった。世界を見渡すとGNH（国民総幸福量）の高い国で障害者はさりと働いている。細分化された教育技術よりゆったりとした成熟した共同体の機能がそれをつくるのだろう。自立活動の「人間関係の形成」や「コミュニケーション」は社会を反映する課題である。障害のある子どもたちが生まれることは不易なこと。既存の社会の型に合わせ育てる側面だけでなく、あるがまま積極的に社会の在り方を問う存在としてぶれジョブをすることで企業や地域の障害観を変え、これからの共生社会を牽引する役割を果たす立場もあわせて考えたい。

ぶれジョブが懐かしいと感じるのはもう一つ、障害のある子どもたち自身が自然を多く抱いた人であるからだ。自然は征服され管理されるものではなく共生し不思議を感じるものである。環境を考える今、住む地域に出てほしい。